

邦語文献目録にみるローザ研究の現状

丸 山 敬 一

1 はじめに

私は今までに3回ローザ・ルクセンブルクに関する邦語文献目録を公表したことがある。第1回目は1980年3月発行の『中京法学』第14巻第4号であり、ここには1921年から79年までのローザ・ルクセンブルクに関する日本語の文献が集められている。第2回目は1994年7月発行の『中京法学』第29巻第1号であり、1919年から92年までの文献を収録している。第3回目の目録は最近公刊されたローザ・ルクセンブルク東京国際シンポジウムの報告集『ローザ・ルクセンブルクと現代世界』（社会評論社、1994）の巻末に載せられたものであり、1994年までの文献を収めている。これらの目録をみれば、わが国において、大正時代以来ローザ・ルクセンブルクがどのように紹介され、研究されてきたかについて、およそのイメージをうることができるであろう。本小論は、これらの文献目録からみたローザ・ルクセンブルク研究の現状をきわめて簡単にスケッチしてみようとするものである。

2 ローザ・ルクセンブルク研究国際会議について

ローザ・ルクセンブルク研究のための国際会議は、1979年当時西ドイツに留学していた中央大学教授伊藤成彦氏によって結成され、チューリヒやリンツで研究集会を開いてきた。1991年11月2～3日にはローザ生誕120年を記念して東京の中央大学駿河台記念館において国際シンポジウムを開催した。この時の報告集が最近相次いで公刊された。田村雲供、生田あい編の『女たちのローザ・ルクセンブルク——フェミニズムと社会主義』

(社会評論社、1994) とローザ・ルクセンブルク東京国際シンポジウム実行委員会編『ローザ・ルクセンブルクと現代世界』(同) である。すでに述べたように、この後者の報告集の巻末に私の目録が載っているのである。この2冊の報告集には外国人の報告もたくさん収録されており、世界のローザ・ルクセンブルク研究の最新の状況を知るうえできわめて有益である。

この国際会議は今秋(1994年11月1～2日)にも中華人民共和国北京市郊外の臥仏寺において国際シンポジウムを開催した。ドイツ語版報告集は参加者の全員に配付されたが、その日本語版や中国語版が出版されるかどうかは、今のところ不明である。

3 研究書

ローザ・ルクセンブルクに関する文献は、わが国では早くも彼女が虐殺された1919(大正8)年に現われ(山川菊栄「リープクネヒトとルクセンブルグ」)、それ以後多少の消長はあっても一貫して関心をもたれてきた。私の文献目録をみても、ここ70年ほどの間に、わが国においてローザ・ルクセンブルクに関するきわめて多くの雑誌論文が発表されてきているのがわかる。しかし、同時にこれほど関心を持たれながらも、単行本の形にまとめられた日本人の手になる本格的な研究書が、きわめて少ないという事実にも驚かされる。今までのところわずかに次の3著があるのみである。

松岡利道『ローザ・ルクセンブルク——方法・資本主義・戦争』(新評論、1988年)

伊藤成彦『ローザ・ルクセンブルクの世界』(社会評論社、1991)

加藤一夫『アポリアとしての民族問題——ローザ・ルクセンブルクとインターナショナリズム』(社会評論社、1991年)

伊藤氏の著書は、氏が1971年から20年にわたって発表してきた17編の論文を内容別に3部に分けて配列したものである。第1部では、冒頭で、彼女の生涯と思想の全体が鳥瞰されたのち、彼女の主要著作『社会改良か革命か』『ロシア社会民主党の組織問題』『資本蓄積論』『ロシア革命論』に対す

る理論的な考察がなされている。第2部では、ローザとマルクス、ベルンシュタイン、カウツキー、ハイネ、トルストイ、グラムシ、ルカーチとの関連が論じられている。これらの人々は、彼女の先輩（マルクス、ハイネ、トルストイ）であったり、激しく論戦した同時代人（ベルンシュタイン、カウツキー）であったり、後輩（グラムシ、ルカーチ）であったりする。これらの人々との理論的な関連を探究することで、ローザ・ルクセンブルクの思想の特質を浮き彫りにすることが、ここで意図されているのである。第3部には日本の社会主義運動とローザ・ルクセンブルクとの関連や、著者自身のローザ資料紀行の成果、彼女に関する国際会議の報告などが収められている。

いずれの論考もなかなか面白く、ローザ・ルクセンブルクの全体像を知るうえで有益である。しかし、著者自身認めているように、本書には、ローザの民族理論に関する本格的な研究が欠けているし、経済理論についても、わずかに『資本蓄積論』がとりあげられているのみである。この2つの欠落をうめるものが、加藤一夫氏の本と松岡利道氏の本である。

加藤一夫氏は、かつてローザの幻の大論文といわれた『民族問題と自治』（論創社、1984年）を邦訳出版したことがある。今回氏が前記東京シンポジウムに合わせて刊行した論文集『アポリアとしての民族問題』は、氏の20年にわたるローザ民族理論研究の集大成である。周知のように、ローザ・ルクセンブルクは、民族自決権を全面的に否定し、諸民族のプロレタリアートの民族を超えた連帯（インターナショナリズム）を主張した。ポーランドに関しても、ポーランドの政治的独立を否定し、わずかに文化的自治の要求のみをかかげた。

もしローザ民族理論におけるこのような展開を跡づけるだけであつたら、加藤氏の研究も従来のわが国の研究とあまり変わらないものに終わったことであろう。しかし、加藤氏の研究には、今までの研究にはみられない特色がある。それは、ローザ・ルクセンブルクの民族自治論を、中世のシュラフタ共和制の基盤をなしていた封建的自治から、近年の「連帯」運動のかかげる自治共和国構想にいたるまでのポーランド自治論の系譜の中に位

置づけている点である。ここに本書の最大の功績がある。

松岡氏の著書は、内容的には2つに分かれる。第1編は、ローザ・ルクセンブルクの方法論の研究に捧げられ、第2編は、帝国主義論形成史にあてられている。この2つの内容に、序章として最近のローザ・ルクセンブルク研究の動向の簡単な紹介と、補論としてカウツキーが1914年に『デイ・ノイエ・ツァイト』に載せた「帝国主義」の草稿および校正刷が付されている。それゆえ、本書は、大別して4つの部分から成り立っているということができるであろう。

第1編「ローザ・ルクセンブルク思想と方法」の部分においては、彼女の方法論が、1913年のドイツ社会民主党内のマルクス＝ラッサール論争をへて、どのように変化したのかが追求されている。そして、ローザ・ルクセンブルクの現代的意義がまさにこの方法論にあることが強調されている。

第2編「ローザ・ルクセンブルクの帝国主義論」では、『ポーランドの産業的発展』にはじまり、『社会改良か革命か』『経済・社会政策展望』『社会改良か革命か』（第2版）『経済学入門』『資本蓄積論』を経て『社会民主党の危機』にいたる彼女の主要著作の中で帝国主義論がどのように形成されてきたかが跡づけられている。従来ともすれば『資本蓄積論』一本に片寄りがちであったローザ経済理論研究の視野を、彼女の全生涯にわたる著作の研究にまで押し広げたことは、高く評価されてしかるべきである。

4 伝記

ローザ・ルクセンブルクの伝記については、まだ日本人の手になる本格的な伝記はみられない。数カ国語に通じ、ヨーロッパを縦横にかけめぐって活躍したローザ・ルクセンブルクの活動の跡をすべて追いかけて、全生涯を調べあげて、独自のローザ像を作り上げることは、極東の島国に住む日本人研究者にとってはなかなか困難な作業である。今のところ、外国人の手になる次の2つの分厚い伝記の翻訳があるのみである。

パウル・フレリヒ 『ローザ・ルクセンブルク——その思想と生涯』

(伊藤成彦訳、お茶の水書房、新装版、1991年)

J. P. ネットル『ローザ・ルクセンブルク』上、下(諫山 正、川崎賢、宮島直機、湯浅越男、米川紀夫共訳、河出書房新社、1974-75年)

前者は「ブレーメン左派」の活動家であったマルクス主義者の著作であり、後者は主としてイギリスで活躍したチェコ生まれの非マルクス主義社会学者の著作であるが、それぞれに特色があり、ローザの生涯と思想の全体像を知るうえできわめて有益である。

すでに述べたように、わが国に初めてローザ・ルクセンブルクを紹介した人は山川菊栄氏であるが、氏が1925(大正14)年に神戸の上西書店から出版したパンフレット『リープクネヒトとルクゼンブルグ』が、前記東京シンポジウムに合わせて91年秋に復刻された。今日からみれば細かい点で誤りがなくもないが、全体としては驚くほど正確なローザ紹介の文献である。

5 書簡

ローザ・ルクセンブルクが、書簡文学とも称すべき美しい手紙をたくさん残したことはよく知られている。わが国では、1925年にカール・リープクネヒトの妻ゾフィーあての手紙が井口孝親氏によって邦訳されて以来、友人や恋人あての手紙がしばしば翻訳されて多くの読者をかちえてきた。それらのうち91年秋に復刻されたものが3点ある。

伊藤成彦訳『友への手紙』(論創社)

川口浩、松井圭子訳『ローザ・ルクセンブルクの手紙——カールおよびルイーゼ・カウツキー宛(1896~1918年)』(岩波文庫)

秋元寿恵夫訳『獄中からの手紙』(岩波文庫)

これらの書簡を『ヨギヘスへの手紙』(伊藤成彦、米川和夫、阪東 宏訳、河出書房新社、1976~77年)全4巻と併せて読めば、彼女の人柄、私生活、党活動のかなりの部分にわたって詳細な情報をうることができるであろう。

6 映画「ローザ・ルクセンブルク」評

マルガレーテ・フォン・トロッタ監督の西ドイツ映画「ローザ・ルクセンブルク」は、1987年岩波ホールをはじめとして日本の各地で上映された。女性監督の手になる大変すぐれた作品で前記の東京シンポの折りにも上映された。

だが、この映画もローザ・ルクセンブルクの理論と行動のすべてを描いていたわけではない。従来、彼女の人と思想を考える場合、少なくとも次の5つの視点を欠かすことができないといわれてきた。第1に、彼女がユダヤ人であったこと、第2に、幼時における腰部の疾患のため一生びっこをひく軽度の身体障害者であったこと、第3に、女性であったこと、第4に、主としてドイツ社会民主党で活躍しながら、出身地のポーランドの運動とも終生関係を保ち続けた人であって、ロシア・東欧の社会主義運動と西欧の社会主義運動の接点にたっていたこと、第5に、彼女の活躍した時代が、帝国主義への移行期であり、新しい理論の形成を迫られた時代であった、ということである。

これら5つの視点が、この映画の中にすべて出てくるわけではない。彼女が徹底したインターナショナリストになったのは、ユダヤ人の家庭の出身だったからだとするのは、ハンナ・アレントの見解である（『暗い時代の人々』）が、この映画では、そうした側面には全く注意が払われていない。彼女のチューリヒ大学時代やポーランドでの活動も全く捨象されてしまっている。ポーランドに関しては、幼児期の回想が2ヶ所ほど出てくるのみである。

この映画で最も強く表に出てきているのは、女性としてのローザ・ルクセンブルクという側面であろう。ヨギヘスへの愛とその破局、年下のコンスタンチン・ツェトキンとの恋が詳細に描かれている。子供を生んで育てたいとヨギヘスに迫るローザ、「結婚なんて時代おくれじゃないでしょうか」と問う一青年に、「私だったらきっと結婚するわ」と答えるローザに、われわれはきわめてありふれた普通の女性をみるのである。彼女は、革命のためには個人のすべての幸福を犠牲にすべきだと主張するようなタイプの女性ではなかったのである。

ローザが繊細な自然観察の人であり、身のまわりの花や小動物にやさしい眼差しを向ける人であったことは、彼女の書簡によってあまねく知られているところである。この側面は、この映画の冒頭で、獄舎の中庭を散歩する彼女の足もとに一羽のカラスがつき従っているシーンや、映画の終わりに近く虐待される牛をみて彼女が涙を流しているシーンに象徴的に表現されている。監督自身が、社会革命家としてのローザよりも、女性であり、人間であった彼女を描こうとしたと語っているが、この意図は完全に成功しているといつてよいのではあるまいか。

革命理論家としての彼女の側面についてはどうであろうか。彼女の生涯における理論活動を年代順にあげていくとすれば次のようになるとと思われる。①ポーランド独立問題をめぐる民族問題論争、②ベルンシュタインとの修正主義論争、③ロシアでの大衆ストライキ戦術をドイツにも採用させようとする大衆ストライキ論争、④『資本蓄積論』や『社会民主党の危機』（ユニウス・ブロッシュレ）を中心とする帝国主義論、⑤「ロシア社会民主党の組織問題」から『ロシア革命論』までを貫くポリシェヴィキ批判。

これらの理論活動の中で、この映画に最もよく出てくるのは、大衆ストライキ戦術の問題と、帝国主義戦争反対の側面であろう。前者の活動の中で、彼女は長年の理論上の同志であったカウツキーと訣別し、後者のたたかいの中で、戦時公債に賛成投票したドイツ社会民主党を糾弾していくのである。

これにひきかえ、修正主義論争については、ダンスを申し込んだベルンシュタインを彼女がすげなく拒絶するというところに象徴的に表現されているにすぎない。ポリシェヴィキ批判の側面は、この映画には全く登場してこない。ポーランド問題も同様である。

それゆえ、この映画は、ローザの多面的な理論活動のほんの一部分を描いているにすぎないといえる。もっとも、映画というメディアの性格から考えて、抽象的な理論上の討論にあまり深入りできないのは当然であろう。したがって、もっと理論活動の面を描くべきであったと要求することは、無理な注文というべきかもしれない。

7 『ロシア革命論』をめぐって

最後に、ローザ・ルクセンブルク晩年の著作『ロシア革命論』について一言しておきたい。というのはこの著作をどう評価するかが、ローザ・ルクセンブルクの現代的意義を考えるうえできわめて重要であると思うからである。

『ロシア革命論』は、ローザ・ルクセンブルクとボリシェヴィキとの関連を示す文献としてわが国でも早くから注目されてきた。古くは西川正雄氏（「ローザ・ルクセンブルクとドイツの政治」）や富永幸生氏（「ローザ・ルクセンブルクのロシア革命論をめぐって」）の研究があるし、最近では、私と伊藤成彦氏が共訳した『ロシア革命論』（論創社、1985年）の巻末に伊藤氏がつけた長文の解説（「ローザ・ルクセンブルクとロシア革命」）もある。

しかし、私はこれらの研究に必ずしも全面的に満足しているわけではない。というのは、これらの研究は、1918年秋にローザ・ルクセンブルクがブレスラウ監獄で執筆した『ロシア革命論』がいかにして出版されるにいたったのか、彼女は後にこの草稿で展開したボリシェヴィキ批判を撤回したのかどうか、といったようなこの草稿をめぐり周辺の諸問題に多くのページが割かれており、この草稿の内容そのものに対する十分な検討が欠けていると思われるからである。今日では、ソ連・東欧の社会主義の崩壊という現実を前にして、『ロシア革命論』草稿の内容に立ち入り、彼女の主張がはたして本当に適切なものであったかどうか、改めて問われなければならないと思う。

『ロシア革命論』草稿の内容は、大別して次の3点であった。①ボリシェヴィキの行動力に対するきわめて高い評価、②ボリシェヴィキがとった具体的政策に対する3つの同志的批判、③ドイツ・プロレタリアートの不甲斐なさに対する弾劾。

周知のように、ボリシェヴィキの具体的政策に対するローザの批判は、次の3点であった。①農業政策、②民族自決政策、③制憲議会の軍隊による解散、民主主義と自由の問題。

ローザ・ルクセンブルクは、農村における社会主義的農業政策は、土地の国有化、農業の集団化だと信じて疑わなかった。この観点から彼女は、農民による土地の即時獲得と分配を認めたボリシェヴィキの農業政策を厳しく批判した。だが、この点は、今日からみるとどうであろうか。ソ連の集団農場ソフォーズやコルフォーズがうまくいかず、中国の人民公社も解体してしまったことを考えると、彼女の主張が全面的に正しかったといえるであろうか。

民族自決政策に対する彼女の一貫した批判についても、彼女を全面的に支持することができるであろうか。政治的ナショナリズムの危険性を指摘し、プロレタリアの国際的団結を唱えた点で、彼女の主張は人類の究極の理想を示すという点では誤っていなかった。しかし、今日のソ連やユーゴスラヴィアにみられるナショナリズムの激しい噴出という事態は、ナショナリズムに対する、よりきめ細かな分析を要求しているのではあるまいか。

民主主義と自由の問題に関してはどうであろうか。彼女は「自由奔放な出版、何のものにも妨げられない結社や集会の自由」「無制限のこの上なく広範な民主主義」を主張した。「自由とは思想を異にする者の自由だ」とまで述べている。

だが、彼女は、こうした絶対的自由論とでもいうべきもの（丸山真男氏の言葉を借りればJ. S. ミル流の自由論）を展開する一方で、プロレタリアートの独裁を要求し、階級の敵に対しては、「政治的権利や経済的生活手段の剥奪」を含むあらゆる抑圧手段がとられるべきだ、と述べている。

「無制限の自由」と「プロレタリアートの独裁」とはどのように両立するのであるか。思うに、彼女はプロレタリアート階級の中では無制限の広範な民主主義と自由が保障され、プロレタリアート独裁はただ階級の敵に対してのみ行われるにすぎない、しかもこれは階級独裁なのであって、今までの一握りの人間による独裁とは根本的に違うのだから、この両者は対立するものではないのだ、と考えられていたのであろう。彼女の理想とした民主主義は、あたかもマルコス体制やチャウシェスク体制の崩壊期に起こったような決起した人民大衆による沸き立つような民主主義、いわば

“街頭の民主主義”とでも呼ぶべき形態のものではなかったであろうか。だが、そのような革命的雰囲気は長続きするものではない。すぐにさめた日常生活がやってくる。その時には、自由と民主主義を保障する制度が必要になってくる。自由も民主主義も抽象的に存在しているわけではなく、一定の制度によってはじめて保障されるものだからである。制度的な考察を全く欠いているのが、ローザ政治理論の顕著な特徴である。このことは、プロレタリアートの独裁についてもいえる。プロレタリア独裁は階級独裁であるといってみても、階級の独裁などというものが、いったいいかなる政治機構で、どのようにして可能なのかについては、彼女は一言も述べていないのである。

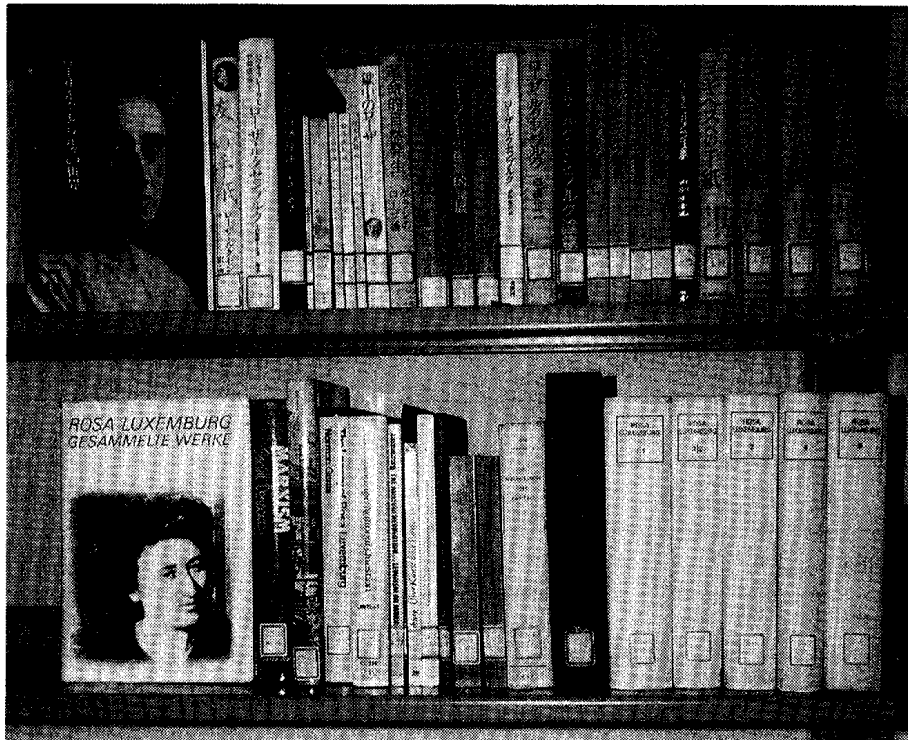
たしかに『ロシア革命論』の中のローザ・ルクセンブルクの言葉は美しい。社会主義の究極の理想を示すものだからである。だが、それをそのまま引用して自著の冒頭を飾るだけでは問題は何ら解決しない。彼女の主張していたことが、はたして本当に実現可能なことだったのかどうかは問われなければならない。

8 真の研究はこれから

従来わが国のローザ・ルクセンブルク研究は、はじめから彼女に好意的な人々、もっといえば、彼女の心酔者たちによってなされてきた。わが国における革命の方策を彼女の革命理論の中に探ろうという態度さえもみられたのであった。たしかに対象に対する熱い思い入れがなければ研究などできるものではない。だが、それは一方で、彼女の言動をできるだけ彼女に好意的に解釈しようという傾向を生み出してきた。ソ連・東欧の社会主義が崩壊し、社会主義に対して距離をおいて冷静な判断が可能となった今日、ローザ・ルクセンブルクについても冷静で客観的な研究が現れてくることになるであろう。その意味で、真のローザ研究は、これからやっと始まるころだともいえるのである。

(1994年11月22日)

写真
ローザ・ルクセンブルクと
中京大学図書館所蔵図書



ローザ・ルクセンブルクに関する中京大学図書館所蔵図書

(和・洋書別、請求記号順)

書名 巻	請求記号	所蔵場所
ローザ・ルクセンブルクの手紙	B 080 I 95	名古屋書庫
ロシア革命論	238. 07 L 97	名古屋書庫
ローザ・ルクセンブルク	289. 3 C 97	名古屋書庫
ローザ・ルクセンブルク	289. 3 F 48	L. S. C
ローザ・ルクセンブルクの世界	289. 3 I 89	L. S. C
ローザ・ルクセンブルク	289. 3 Ko27	名古屋書庫
獄中のローザ	289. 3 L 97	名古屋書庫
ローザ・ルクセンブルクの手紙	289. 3 L 97	名古屋書庫
ヨギヘスへの手紙 1～4	289. 3 L 97	名古屋書庫
友への手紙	289. 3 L 97	L. S. C
獄中からの手紙	289. 3 L 97	豊田開架
ローザ・ルクセンブルク論集	304 Sa29	名古屋書庫
ローザ・ルクセンブルク選集	308 L 97	名古屋書庫
カールとローザ	309. 4 Z 3	名古屋書庫
革命的自然発生	316. 5 G 91	名古屋書庫
アポリアとしての民族問題	316. 8 Ka86	L. S. C
マルクス主義と民族問題	316. 8 L 97	名古屋書庫
民族問題と自治	316. 8 L 97	名古屋書庫
経済学評注	331. 6 L 54	名古屋書庫
ローザとマルクス主義	331. 6 L 96	名古屋書庫
資本蓄積論 上中下	331. 6 L 97	名古屋書庫
経済学入門	331. 6 L 97	豊田開架
ポーランドの産業的発展	602. 349 L97	名古屋書庫

Rosa Luxemburg, Women's Liberation, and Marx's Philosophy of Revolution	309. 3 D 97	名古屋書庫
The Legacy of Rosa Luxemburg	309. 3 G 36	名古屋書庫
Reden	309. 3 L 97	名古屋書庫
The Russian Revolution and Leninism or Marxism?	309. 3 L 97	名古屋書庫
Marxism and Social Democracy	309. 3 Ma59	名古屋書庫
Nationalismus und Internationalismus bei Rosa Luxemburg	311. 3 H 52	名古屋書庫
Die Akkumulation des Kapitals	331. 6 L 97	名古屋書庫
Gesammelte Werke, Bd. 1~5	331. 6 L 97	名古屋書庫
Rosa Luxemburg. Rede zum Programm.	331. 6 L 97	名古屋書庫
Rosa Luxemburg. Briefe aus dem Gefangnis	331. 6 L 97	名古屋書庫
Rosa Luxemburg oder Die Bestimmung des Sozialismus	331. 6 R 71	名古屋書庫
The National Question	331.6 L 97	名古屋書庫
Schriften über Kunst und Literatur	904 L 97	名古屋書庫

☆ L. S. C はライブラリーサービスセンター